



Title	農村からの移民労働者の資本主義化による意識の変化 とタイ語の語用・意味的变化 : ンガーン (ง่าน) 用法 の考察から
Author(s)	今村, 都
Citation	アジア太平洋論叢. 2022, 24, p. 255-264
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/95092
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

農村からの移民労働者の資本主義化による意識の変化とタイ語の語用・意味的变化 —ンガーン (ง่าน) 用法の考察から—

Thai Pragmatic/Semantic Change due to Capitalization of Migrant Workers from Rural Area Analysis of *Ngan* (ง่าน) Usage

今村 都*

IMAMURA Miyako

Abstract

In this paper, the results of the interview about *Ngan* with Thai migrant workers from a rural area and traditional *Ngan* concept in the previous study will be compared, to reveal how capitalization has changed their *Ngan* concept and what traditional value remains in the word.

Ngan indicates work, objects of work, and rituals; the previous study explains this is because working in a rice field, obtain crops, and offer them in the ritual was always a series of events in traditional rural life. In other words, the *Ngan* was not just a personal activity to acquire wealth, but a system of redistribution to maintain the rural community.

In order to compare with the results of the previous study, the researcher conducted a total of three weeks of observation and interviewed 21 factory workers about their life history and the meaning of *Ngan* in a factory in Thailand.

The results of this study revealed that for contemporary migrant workers from a rural area, the context of *Ngan*: work, the object of work, and rituals, has become detached and more strongly indicative of wage labor, due to their geographical isolation from rural society. On the other hand, their migrant work was meant to sustain rural livelihoods through remittances to rural area and to prepare for their own rural life in the future by forming assets. Therefore, it was indicated that even today, their work is to sustain rural communities; the work is not just for individual needs. Therefore, *Ngan* still maintains its means “a system of redistribution to maintain rural community” though capitalization in Thailand has expanded.

Keywords: Ngan, Capitalization, Modernization, Tradition, Migration

I はじめに

本論文では農村から都市部に働きに来ているタイ人工場労働者のンガーンに関する聞き取り結果を用い、先行研究において示されている伝統的なンガーン概念との比較を行う。これによって彼らにとってのンガーン概念が、近代的労働によっていかに変化したか、また、近代的労働に従事してもなお残る伝統的価値観を明らかにする。ンガーン概念とは、辞書では仕事、業務といった訳語の他に、催し、行事、祭りに関する用法などが記載されている（富田1997:352）。このンガーンという用語は外国語に翻訳しがたいタイの文化的価値観を含んだことばである。本研究により、伝統社会と資本主義化のはざまにある現在のタイの人々の在り方を明らかにすると同時に、資本主義は伝統文化と混ざり合い、いかなる近代化をもたらすかという普遍的な問いに対する一つの実証例を示すことを目的としている。

II 先行研究レビュー

1. 伝統文化と近代化

産業化や資本主義化による文化変容はこれまで「近代化」として論じられてきた（Inglehart and Baker 2000）。近代化が伝統社会をどう解体するかという問いは、19世紀半ばには、マルクスが『経済学批判要綱（Foundations of the Critique of Political Economy）』において検討

* 大阪大学大学院経済学研究科・博士後期課程

している (Marx 1978)。マルクスにおいてはアジア的な社会や封建的な社会はその後の資本主義社会、そして共産主義革命に至るまでの過程の一つであると捉えられていた。その後ウェーバー (1930) によってキリスト教・プロテスタンティズムの精神が資本主義を推進するなど、宗教や文化が資本主義社会に影響を与えるということが示された。現代においては、工業化・近代化の波は西欧諸国の外側まで広がり、世界規模で近代化という事象が急速に進展するという事態が発生している。イングルハートとベーカー (2000) は、資本主義社会は社会をある同じ方向へと変化させるが、その変化は土着の伝統文化の影響に晒されるがゆえに、変化の結果が同じ場所に収束する (世界が均質化する) わけではないとしている。

2. タイ近代化の社会的背景

タイは、1852年にシャムとイギリスがボウリング条約を締結したことを契機に世界市場に解放され、コメを主要な作物とし、海外との取引を行うようになった。1960年代以降になると、貨幣経済の拡大により、より経済効率を重視した活動がなされるようになった。その結果、農村では新たな商品作物の生産の他、出稼ぎ労働も徐々に一般化してきた (Molle 2020)。特に1990年代以降、外資系製造業のタイへの進出が盛んになり、日系自動車産業を中心とした、資本集約的製造業部門の発展が強調されるようになった。これに伴い農村の人々の工場への一時的な労働従事は急増した。特に東北部はコメの収穫量が他の地域に比べて少ないため、工場への出稼ぎ労働力の最大の供給源となった (重富 1996)。一方で農村の出稼ぎ労働者は土地を持っている自作農民であることが多く、彼らの出身コミュニティでは彼らが出稼ぎ労働で得た収入によって自給的自作農経営が維持されている。この点で彼らの出稼ぎは、土地から切り離された全く自由な労働力とは異なる。つまり彼らの出稼ぎは、一方に農村の共同社会的関係という自給的性格を保持しながら、他方労働力の商品化という市場経済的關係に組み込まれるという二重的性格を持つ (菅原 2016)。

3. タイ人の近代化体験とンガーン概念

平井 (2011) は、タイの農村から工場へ通う労働の近代化体験を描いている。同研究は1994年の北タイにおける日系企業の工場での、特に女性の工員を対象としたエスノグラフィー調査である⁽¹⁾。平井の研究ではタイ農村の伝統的な仕事における価値観や行動パターンが説明されている。農村の社会において仕事を示す「ンガーン」は稲作、畑作、賃金労働といった「家の外の仕事」と家事や育児、儀礼といった「家の中の仕事」の全てを指す。農作業や儀礼、家の修理など人手が必要な作業は相互扶助を基本としており、仕事で行き来し合う人々を彼らはコミュニティの中の人であると認識している。「仕事」をすることはその人の名誉や関係を形作る。したがって、「仕事」は経済活動というよりは社会活動であり、他の活動から独立したものではないとされている。

伝統的なンガーンの用法に関して、平井(1998)の「北タイ農村における「仕事」概念の一考察」ではンガーンは賃金労働のみを示すものではなく、ンガーンの重要な部分は、経済的機能から独立した社会的機能、特に儀礼をめぐる相互行為の中にも現れてくると述べられている。さらに仕事と儀礼に加え、ンガーンは「仕事の対象物」という意味を持つ。このことに関して、平井はブルデューの「農民は、自分の労働と、『やがて収穫される』生産物とを、区別しない」を引用して説明している (平井 1998:558)。これらをまとめて、平井は仕事、儀礼、仕事の対象物が全てンガーンという言葉で表されることに対し、ンガーンが、食べ物を収穫して、それをコミュニティに捧げるという一連の行為であると考えれば、「仕事」と「儀礼」という2つの行為は、一つの継続する活動における2つの段階と捉えることができるとしている (平井 1998:581-582)。つまり、仕事と仕事の対象物、そしてそれを捧げる儀礼はすべて一続きのものであり、ンガーンという一単語で示されるとしてタイの伝統的なンガーンを定義している。さらに平井は、成果を個人が一人で消費してしまうような活動はンガーンとみなされないとして、「ハー・ギン」という言葉を取り上げている。ハー・ギンは直訳すると探す (ハー) という言葉と食べる (ギン) という言葉が合わさった熟語であり、直訳すると「食べるを探す」となる。

平井がフィールドワークを行なった農村において、この言葉は「食べ物の採集」として使用されており、平井はハー・ギンをその活動に関わった個人あるいは世帯だけで吸収してしまうような活動であるゆえに、ンガーンとみなされていないと分析している（平井 1998:536）。

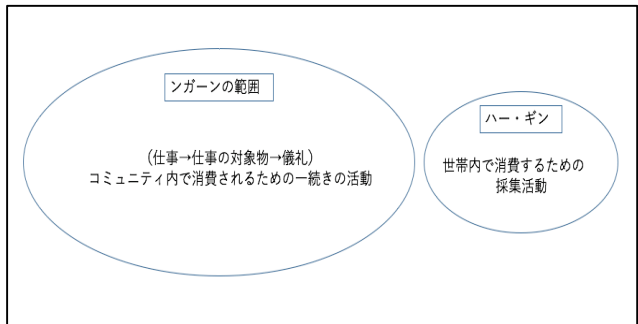


図1 平井定義のンガーン

すなわち、平井のいうンガーンとハー・ギンの違いを社会的意義の観点でまとめると、ンガーンとは農村コミュニティの中での相互行為により仕事を助け合い、そこで得た農作物を儀礼で捧げるという、農村コミュニティ維持のための再配分のシステムであり、ハー・ギンは世帯内で消費するための採集活動であるということが示されているのである（図1）。

Ⅲ 本研究の調査方法と対象

本調査はタイ人移民労働者にとっての労働観を明らかにするため行った研究の一部である。筆者はタイ・ラヨーン県の日系製造業の工場で合計3週間にわたる観察とライフヒストリーの聞き取りによるインタビュー調査を行った。ラヨーン県はバンコクから東に180キロほどの場所に位置する、工業団地が多数立地する海に面した地域であり、多くの日系企業が進出している。対象企業は2001年に操業を開始した鉄鋼製品の加工を行う工場であり、104名の従業員を抱える。104名の従業員のうち、現場作業員は69名である。基本的に工場労働者は出稼ぎ人材で、平均勤続年数は6年8か月であり、従業員は一定の定着を見せている。

調査は2018年2月に約2週間、2018年8月に約1週間行った。調査期間中、筆者は同社内に滞在し、常時観察事項のメモをとり、会社運営と労働者たちの勤務実態を把握した。状況がある程度把握され、労働者との関係も一定程度構築が進んだ2月調査の1週間経過頃からはインタビューを開始し、毎日1-3名程度へのインタビューを行った。インタビューの概要は表1の通りである。プライバシーの観点からインタビューの氏名は公開しないため、便宜上判別記号A1-A21を振り分けている。現場視察中も適宜現場作業員への聞き取りを行っており、インタビュー結果とは別に10名の聞き取りを行っている。これらを合わせて、フィールドワークノートA4用紙で37ページ分のデータを得ている。現場視察中に得たデータの中で、本論文で引用するものに関しては発言者の属性を記載している。

表1 インタビューの概要

ID	インタビュー実施日	性別	年齢層	勤続年数	職階	出身地域*	学歴
A1	2018年8月10日	男性	30代	7年	オペレータ	中部	M6（高卒）
A2	2018年8月9日	男性	30代	11年	リーダー	東北部	M6
A3	2018年8月9日	男性	20代	4年	オペレータ	中部	PWC（職業訓練校2年）
A4	2018年8月9日	男性	20代	4年	オペレータ	東北部	M6
A5	2018年8月8日	男性	30代	8年	リーダー	東北部	M5(高校中退)
A6	2018年8月8日	男性	20代	4年	オペレータ	東北部	PWS（職業訓練校5年）
A7	2018年8月7日	男性	30代	12年	オペレータ	東北部	M6

A8	2018年8月7日	男性	20代	5年	オペレータ	東北部	M6
A9	2018年8月7日	男性	30代	8年	オペレータ	東北部	M6
A10	2018年8月6日	男性	40代	8年	オペレータ	東北部	M6
A11	2018年8月6日	男性	30代	6年	オペレータ	東北部	M6
A12	2018年2月16日	女性	20代	6年	オペレータ	東北部	M6
A13	2018年2月16日	女性	30代	7年	オペレータ	東北部	PWS
A14	2018年2月15日	男性	20代	4年	オペレータ	北部	PWS
A15	2018年2月15日	男性	30代	5年	オペレータ	東北部	M6
A16	2018年2月14日	男性	20代	3年	オペレータ	東北部	M3 (中卒)
A17	2018年2月14日	男性	20代	3年	オペレータ	中部	M6
A18	2018年2月13日	男性	30代	6年	オペレータ	東北部	M6
A19	2018年2月13日	男性	30代	6年	オペレータ	北部	M6
A20	2018年2月12日	男性	30代	4年	オペレータ	東北部	M6
A21	2018年2月12日	男性	30代	5年	オペレータ	中部	M6

*タイ国家統計局(NSO)の地域区分に基づく

表1から見て取れる通り重工業のため体力の必要な仕事が多く、基本的に男性が中心の職場である。年代は20～30代が大多数を占め、勤続年数は最短で3年、最長で12年である。タイの出稼ぎ労働者は工場労働に20代から30代までの間、20年ほど従事し、40代になると大半は退職し、地元に戻るという事実がここに反映されている。学歴については高校卒業程度に当たるM6を卒業した人が最も多く、タイの工場労働者としては一般的な学歴である。出身地域に関してはラヨン県の出稼ぎ労働者の多数派を占める東北部の出身者が多くなっているものの、北部や中部の出身者もあり多様な地域の出身者が含まれている。

本研究のインタビューは過去、現在、未来という時間軸に従って半構造化されている。内容は大きく分けて1.過去に関する事項-幼少期や学生時代の生活、2.現在に関する事項-仕事とプライベート、特に仕事に対する意識や問題、人間関係、家族、家計、余暇に関して3.未来に関する事項-今後のキャリアや人生の目標に関する計画となっている。

IV 発見事実

1. 農村コミュニティでのアイデンティティ形成と労働

まずは彼らの家族構成、幼年期・青年期、また現在の生活と支出の状況そして未来の希望を概観してゆく。詳細は文末附表の通りであるが、彼らは農村部の出身で多くの場合幼少期は複数の兄弟に囲まれて生活をしている。彼ら自身も農業に参画し、学生時代は家業を手伝いながら学校に通っていた。

学校に行く前は牛や水牛を畑に連れて行って面倒をみて、学校から帰るとまた連れて帰る。これは自分の仕事としてルーティーンでやっていた。(A10)

土日は農業を手伝っていた。平日は学校に通うが、両親は畑の方に住んでいるため金曜日に会いに行って手伝う。(A5)

放課後はサッカーをしたり農業を手伝ったりしていた。(A6)

現在については、異性のパートナーと二人暮らしであるというケースが多い。子供がいる場合でも、パートナーか自らの両親に子供を預け、そこに送金して農村の家族を扶養している。この送金の他、家と車のローンが支出の中でも大きな割合を占めていた。彼らはこの多額なローンを「将来地元に帰るための資産を形成するためだ」と説明している。

働いている理由は家族を養うこと、そしてお金をためて将来地元に帰るため。(A20)

仕事は家を買う、車を買う、子供に教育をするなど将来の基盤を作るためにやっている。(A10)

仕事は将来のためにやっている。お母さんが苦勞しているので、お母さんを楽にさせたい。今も母を養っている。(A4)

彼らの将来の希望は概ね 40 代で地元に帰り、家族と生活しながら農業や自営業を営むことである。インタビューの結果退職希望年齢の回答を得られた人数は 13 人で、その平均は 42 歳であった(退職を希望している年齢としては 30 代から 50 代にまで渡る)。対象企業の就業規則では従業員は 60 歳の定年まで働くことができ、また能力が認められればオペレータの立場からリーダー、チーフ、マネージャーへと昇格することが可能である。すなわち会社のシステム上は日本と同様に長く働くことが可能な状況が用意されているものの、作業員は一生現在働いているラヨーンに住むつもりではなく、定年を待たずに地元に帰りたいと考えているようであった。

こうした田舎、伝統社会への回帰希望は、家業である農業は親世代から受け継いで続けていくものという考えが彼らに根強く定着しているからだという⁽²⁾。彼らは生まれ育った土地を捨てて、地元から家族ごと引っ越すことは想定していない。地元で農業や自営業をして生計を立てられれば、それが彼らにとって理想的な生活であると考えられている。

あと 5 年したら仕事を辞めて実家の両親の面倒を見ながら田んぼをしたい。新しい野菜も植えてみたい。(A20)

あと 3 年ほど働いたら地元で農業をしたい。上司の日本人たちは 10 年働けというけれど…両親も心配なので農業がしたい。今は兄弟も車が運転できないため両親の具合が悪くなったら別の人を雇って病院に連れて行ってもらっている。農業が好き。お金は重要ではない。農業は、工場労働ほどは儲からないが、サバァイ・ジャイ(心が快適)。(39 歳男性・現場チーフ)

仕事を辞めたら妻の地元で農業やまくらを作るビジネスをしたい。今はやる人がいないため人を雇ってやっている。そうした方が日々の生活費が安くつき、サバァイ・ジャイ(心が快適)だと思う。野菜を植えて魚や動物を飼い、自分で食べる。(A21)

あと 3 年すれば実家に帰ってコーヒーショップをしたい。実家はコーヒー豆の生産をしている。それを今は卸しているが、(そのコーヒー豆を使って)コーヒーショップをやりたい。(38 歳男性・現場リーダー)

総じて、彼らは出身地である農村での生活に人生の基盤を置いている。彼らは農村で幼少期

を過ごし、アイデンティティを確立した。現在においては、資本主義社会の中で生き抜く手段として両親や子供を農村に残し、工場労働に従事して現金収入を得ることで農村の生活を維持している。また将来自らも早期に退職して地元に戻ることを考えているため、それに向けた資産形成を実践しているのである。

2. ンガーンとは

本インタビューでは彼らのライフヒストリーに加え、「ンガーンとは何か」という質問をした。その結果以下のような結果が得られた。

表2 ンガーンに関する聞き取り

ID	ンガーンとは
A1	責務であり役割。
A2	しなければならないこと、お金に換えられるもの。
A3	お金。
A4	しなければならない役割。
A6	お金の源。
A7	人生の一部でやらなくてはいけないこと。
A8	やらなくてはいけないこと。
A9	ものを別の形に変えること。
A10	お金があること。農業もやらなければ食べるものがない、工場の仕事も同じ。
A11	お金。

本質問は平井が定義したンガーンを念頭に置き、ンガーンがもつ仕事や仕事の対象物、儀礼などの広い意味に関して、その定義をいかに捉えるかという意図をもって尋ねたものである。結果としては仕事に行われたインタビューであるというコンテキストも影響し、回答として得られたのは工場労働をイメージしたものであった。よってンガーンのもつ広い意味の定義を尋ねようという試みは成功しなかった。「ンガーンは仕事を意味することもあれば、完成済みの製品を意味することもあるし、結婚式のような儀礼を意味することもある。なぜこのような広い意味を持っているのか？」と説明して尋ねると、以下のような回答が得られた。

ンガーンはイサーン語 では結婚や出家式のことをミー・ンガーン という。中部ではンガーンはンガンだ。(A5)

ンガーンはンガンだという言葉に内包されるのは、単純にンガーンと表現した場合、工場労働者のコンテキストからはやはり賃金労働がイメージされるということである。ここから分かるように彼ら自身はンガーンという言葉の示す範囲の広さには無自覚であり、コンテキストに応じて「仕事」「儀礼」「仕事の対象物(工場労働のコンテキストにおいては製品)」を示すものとしてンガーンを使っている。

表2の示している通り、インタビューの結果としてはンガーンとは「お金である」と「役割である」に概ね二分される。これらの回答も彼らが農村コミュニティのために工場労働に従事しているというコンテキストを加味すると理解がしやすい。

彼らが幼少期を過ごした農村において、ンガーンとはコミュニティ内で果たすべき役割であった。農作業にしろ、儀礼にしろ、集団の中で自らが参加すべき立場にあるとき、個人の意志とは関係なく、積極的に手伝うことが役割として求められてきた。そして資本主義化にともなって、彼らが農村の中で果たすべき「役割」は農村という地理的な枠組みを超えて、工業団地への移住労働へ発展した。以前は仕事をし、農作物を得て、儀礼で再配分するという流れを持っていたンガーンは、現在においては工業団地で仕事をし、金を得て、それを送金することでコミュニティに資する形となった。先行研究では、出稼ぎ労働者の多くが自作農民であり、周辺の土地を持たない農民を雇用するための、現金を稼ぐために工場労働に従事していることが示されていた。それに加え、今回の調査では、出稼ぎに来ている労働者自身も将来は農村へ帰

り、今後もその生活を守りたいと考えていることが明らかになった。これは、彼らの出稼ぎ労働は単なる血縁や個人的な欲求を超えた農村コミュニティのためのものであることを示している。つまり、一見すると西洋的な資本主義に向かっているとみられるンガンという言葉も、農村コミュニティを維持するための一連の行為から逸脱しているわけではない。

一方、この変化により「ハー・ギン」と「ンガン」は平井が論じたような形で分かつことが難しくなった。つまり、都市での工場労働に従事しているうちは、平井の調査した農村コミュニティのように直接食物を採集して「ハー・ギン」することはできなくなり、ハー・ギンは賃金労働であるンガンを通して行うものとして認識されることになった。したがって現在においてはより「食い扶持を探す」つまり働き口を探すという意味でハー・ギンが使われるようになり、ハー・ギンの持つ採集活動という意味合いは小さくなっているといえる。ハー・ギンに近い表現として「金を探す（つまり働いて賃金を得る）」という意味のハー・ンゲンがあるが、ハー・ギンはハー・ンゲンと同様に、ンガンの中の、「仕事」の範囲に重複する意味合いを強めたといえる。（図2）

再度平井研究と本研究の差異をまとめると、平井の研究において、1998年に発表された「北タイ農村における「仕事」概念の一考察：相互行為と社会関係」では農村社会でのフィールドワークにより、ンガン概念が農村コミュニティ内での再配分システムであること、そしてそれと意味を分かつものとして、家庭内消費のための採集活動であるハー・ギンという概念が紹介されていた。これに続き 2011 年に発刊された『村から工場へ-東南アジア女性の近代化体験』においては、上記の論文で示した伝統的なンガン概念が女性の工場労働にも受け継がれ、工場労働はンガンの一部として捉えられていることが示されている。

一方で、現代の労働者にとって、平井が論じたようにンガンとハー・ギンの意味範囲が明確に異なるということはない。ハー・ギンは、平井の示したような家庭内消費のための採集活動だけではなく、賃金労働を指すものとなっている。その点では、工場労働であるンガンとの意味の重複がみられる。

さらに、一連の流れとして認識されていた仕事や仕事の対象物、儀礼という意味はある程度コンテキストに応じて分けられて使われるようになったことが本研究で示された。これは彼らが奉仕するコミュニティと仕事の場所、つまり今回の調査においては工場が物理的（地理的）に分断されたものになったということが影響していると考えられる。そして、少なくとも工場労働についているうちは、ンガンで意味するコンテキストは「仕事」の意味合いを強め、ンガンという一単語を用いた場合、賃金労働が想起されることが多くなった。この点ではンガンの中で仕事を意味するところだけがより大きくなった（語用として多くなった）といえるだろう。これらは資本主義の流入による近代化であるといえるが、彼らの「仕事」そのものが農村生活の下支えという意味合いを持っている。したがって、現代の工業団地における移民労働においても、平井研究で示されたような、農村コミュニティ維持のためのシステムとしてのンガンの性格は残されている。

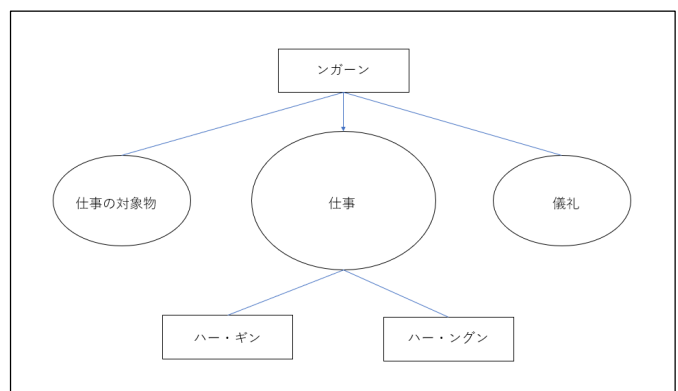


図2 筆者定義のンガン

V まとめと考察

平井研究との違いがみられた背景として、まず本研究と平井研究の調査場所の違いが挙げられる。平井は伝統的なンガンの定義をまとめるために、この聞き取りを農村にて行っている。

つまり平井がまとめようとした伝統的ンガンとは、西洋的な「仕事」概念を基軸として、あえてタイの伝統的なンガンの意味を探索したという点で伝統と近代化の通時的な側面がある。一方本研究で対象としているのは、近代的な労働に就く労働者であり、彼らの聞き取りにより、ンガンの中に残る伝統性を探るという点で、農村の伝統社会と都市の近代的労働の共時的な関係を探るものである。故に平井研究と本研究との違いがみられるのは当然の結果ではあるが、平井研究との比較により伝統社会が一方に西洋的資本主義に向かうわけではなく、伝統社会の影響を受けて独自の発展を遂げるというイングルハートとベーカーの理論を実証的に示したといえる。

さらに、本研究と平井研究の違いとしては時代背景が挙げられる。平井研究が行われたのは1994年であり、1990年代以降のグローバル資本主義化の初期のころであるといえる。農村の人々にとって、工場労働は新たに出現した選択肢の一つであり、工場労働がある意味で宿命づけられた現代の労働者に比べると資本主義化の度合いはまだ低かったと考えられる。さらにその時代背景と関連して、彼らが労働に従事する周辺環境の違いも挙げられる。平井研究で対象とされてる人々は農村に暮らす人々、そして農村から工場に毎日通勤して工場労働に従事する人々であった。それゆえ平井研究の対象者は地理的にも時間的にも農村社会と切り離されてはおらず、常に伝統的農村社会と近代的労働との間を行き来している。一方本研究で対象になっている労働者は農村から一時期に工業団地付近に移住して働く人々であり、工場労働に従事する20代～30代の期間は農村社会から地理的に切り離された生活を送ることになる。タイのグローバル資本主義が進行するにつれて、産業集積により工場が一地域に集中し大きな工業団地となったため移民労働の形が一般的になった。このことにより、農村社会と近代的労働（資本主義社会）の精神的な分離が進んだと考えられる。

VI 残された課題

本研究の残された課題としては、ンガン概念と地域性の関連を探ることが挙げられる。タイ中部、北部、東北部、南部などでそれぞれ違ったタイ語の方言が日常言語として使用されている。例えばタイ東北部においてはイサーン語と呼ばれるタイ語の東北方言が使用されており、そこではンガン以外にもウィアックという単語が仕事を表す言葉として使用されることがある。このような文化や言語使用の習慣の違いを今後本研究にも盛り込んでいくことが必要であると考えられる。さらに本研究をさらに精微化するためには、地域による文化・言語の違いに加え、対象の社会集団ごとの調査をした方がよいであろう。今回対象としたのは、学歴としては高卒程度で、工場で働く労働者であったが、大卒社員、オフィスワーカーではまた別の結果が得られるかもしれない。また、中華系やタイ系、マレー系など、タイ国内に複数存在する民族によっても違いがみられる可能性がある。

注

- (1) 人類学の分野において女性工員は「搾取される」立場として描かれてきた。本研究で平井はそのような理解に疑問を呈している。
- (2) タイ人製造マネージャーの聞き取りによる。

引用・参考文献

欧文文献

- Berry, J. W. 1997 "Immigration, Acculturation, and Adaptation," *Applied Psychology*, 46(1): 5-34.
Inglehart, R., & Baker, W. E. 2000 "Modernization, Cultural Change, and the Persistence of Traditional Values," *American Sociological Review*, 19-51.
Marx, K. 1973 *Foundations of the Critique of Political Economy*. Vintage Books.
Molle, F. 2020 "Agrarian change in the central plain in Thailand (1950-2020)," *A Longitudinal Study of Farm Characteristics Japan-ASEAN Transdisciplinary Studies Working Paper Series*, 9: 1-20.

Weber, M. 1930 *The Protestant Ethic and the Spirit of Capitalism*. Simon & Schuster.

和文文献

- 重富真一 1996 「タイ農村のコミュニティ——住民組織化における機能的側面からの考察」『アジア経済』37(5): 2-26。
- 菅原昭 2016 「タイの出稼ぎと民主化——東北タイの事例を中心として」『神奈川大学アジア・レビュー——アジア研究センター年報』3: 68-80。
- 富田竹二郎編 1997 『タイ日大辞典』めこん。
- 平井京之介 1998 「北タイ農村における「仕事」概念の一考察——相互行為と社会関係」『国立民族学博物館研究報告』22: 527-584。
- 2011 『村から工場へ——東南アジア女性の近代化経験』エヌティティ出版。

附表 調査対象のタイ人出稼ぎ労働者の過去、現在、未来

ID	両親と兄弟 ()内は本人	家業と幼年・青年期の生活	現在の家族関係	支出状況 (単位: パーツ, 特に記載のないものは月あたりの金額)	将来の希望
A1	父、6人兄弟 (末っ子)	農業。放課後や土日は家の手伝い。	妻と2人暮らし。子供は自分の姉と地元に住んでいる。月一回会いに行く。	父親に1000 (ボーナス時には10000) 子供に8000 家のローン13700 自動車ローン完済	田舎で車の洗車の仕事をしたい。その仕事を始めるには100万パーツほど必要で、(貯めるのに)10年はかかる。
A2	両親、3人兄弟 (長男)	農業。子供のころは稲作の手伝い。	妻と住んでいる。	両親に3000 自動車ローン10000	地元の家を建てたい。仕事は親戚のやっているミニマートをやりたい。50万パーツたまったらやるつもりだが、子供ができるのでまずそちらお金を使う。
A3		農業	妻と2人暮らし。子供は親に預けている。	両親に2000-5000 (子どもの養育費含) 自動車ローン9900	農業をしたい。
A4	両親、5人兄弟 (末っ子)	農業。M1-M3は学費と生活費をまかなうため出家。	兄と2人暮らし。	母親に3000 バイクローン完済	農業をしたい。売り上げの多いトウガラシを植えてみたい。
A5	母、7人兄弟 (5番目)	農業。土日に農業の手伝い。	10年前に結婚し2ヶ月前に離婚。6歳の娘が1人。娘は妻の親に預けている。	母親に5000 子供に6000 自動車ローン12000	魚釣りの店を開きたい。既に場所も見つけている。親戚を雇って店番をしてもらう。50歳くらいで田舎に帰り、あとは家で農業をする。
A6	両親、2人兄弟 (2番目)	農業。放課後はサッカーをしたり農業を手伝ったりする。	妻と2人暮らし。子供は親に預けている。	自分と妻の両親にボーナス時に15000-20000 (年1回) 子供に5000 自動車ローン10000	地元でビジネスをしたい。
A7	両親、4人兄弟 (長男)	農業。	妻と2人暮らし。	両親に1000-2000、自動車ローン10000	農業か食べ物を売る商売をやりたい。
A8		農業。	別れた妻と子供がいる。	両親に年2-30000 子供の養育費年20000 自動車ローン10000	
A9		農業。	現在の妻と2人暮らし。離婚歴有。元妻のほうに息子1人。	子供に週3-500 自動車ローン9400	実家で農業。氷工場のビジネスにも興味がある。

A 10	両親他界、5人兄弟（末っ子）	農業。学校に行く前と帰った後に牛の世話。	妻と2人暮らし。子供は妻の親に預けている。	子供に5-6000バイク、自動車ローン完済	農業と物売り。
A 11		農業。	妻と2人暮らし。子供は親に預けている。	子供へ月2-3回送金 自動車ローン完済済	もうすぐ実家に戻って農業をする。
A 12	4人兄弟（3番目）	農業（コメやサトウキビ）。	夫と2人暮らし。子供が1人（10歳）、親に預けている。	子供に7-8000 自動車ローン10500	将来ラヨーンで釣りのお店を開きたい。そのためには60万パーツくらいお金が必要。
A 13	両親、姉（兄弟数不明）	農業。自分も手伝い。	夫と2人暮らし。子どもは地元で預けている。	両親に4-5000 家のローン12200 自動車ローン11000	実家で食べ物を売ったりオンラインで物を売ったりしたい。
A 14	両親、妹（兄弟数不明）	農業（たばこの生産、加工）。自分も手伝い。	妻と2人暮らし。	自動車ローン12000	実家で精米のビジネスをやりたい。
A 15	4人兄弟（2番目）	出家して喜捨で学校に通った。	妻、子供2人と同居。	自動車ローン10400	妻の実家で砂糖工場の輸送を請け負う仕事がしたい。
A 16	両親他界、姉と腹違いの弟		姉、姉の旦那と3人暮らし。	自動車ローン8100	実家に帰りたい。
A 17	両親、3人兄弟（3番目）	農業。	1人暮らし。	バイクのローン1500	
A 18			妻と娘と同居。	自動車ローン完済	実家でミニマートをしたい。開店資金は30万パーツほど必要。
A 19		農業。	妻と2人暮らし。以前のパートナーも合わせて4人子供がいるが、親に預けている。	養育費合計14000	
A 20	両親、兄弟がいる（兄弟数不明）	高校は働きながら通った。	妻と子供と3人暮らし。	家のローン3600 自動車ローン13000	地元で田んぼをしたり野菜を植えたりしたい。
A 21	両親他界、7人兄弟（6番目）だが4人目の兄弟はもう亡くなっている。		妻と2人暮らし。	妻の実家に5000 家のローン10060 バイクローン3600	妻の実家で農業やまくらを作るビジネスをしたい。